



南十字星創刊60周年記念企画

すぎのかずお 杉野一夫さんへインタビュー



(左から)森田恵莉華さん、西山ひろ美さん、杉野一夫さん、藤本直哉広報部部长

昨年11月、元日本人会事務局長の杉野一夫さんが勲章(旭日単光章)を受章されました。シンガポール日本人社会では50年振り二人目の受章者になりました。日本人会ラウンジでインタビューを行い、喜びのお気持ちとシンガポールの体験談をお聞きしました。

(実施日:2025年3月1日)

聞き手

藤本直哉 広報部部长
西山ひろ美、森田恵莉華

南十字星編集委員、ミュージアム日本語ガイドグループ

— 自己紹介をお願いします。

杉野さん 日本の大学を終え、1972年9月シンガポールにやってきました。今年でシンガポール滞在、53年になりました。1984年日本人会に勤めることになり、1987年に事務局長に就任し、27年間同職を務めました。1978年Dr Tan Wan Gheeと所帯を持ち、二人の娘と一人の息子に恵まれました。

— 改めて旭日単光章の受勲、おめでとうございます。今のお気持ちや、受勲前後で何か変化などがございましたらお聞かせください。

杉野さん 多くの友人から祝辞を頂き、改めて、喜びをかみしめています。生活、気持ちに特段変化はありません。



藤本直哉広報部部长

— 旭日単光章はどのような経緯で受勲なされたのでしょうか。

杉野さん 受勲候補者は、「春秋叙勲候補者推薦要綱」に基づき、各省各庁の長から推薦されます。内閣府賞勲局は、推薦された候補者について審査を行います。その後、閣議に諮り、受章者が決定されます。わたくしの場合、外務省からの推薦で受章に至りました。在シンガポール日本国大使館のスタッフの方が熱心にレポートを纏め、推薦してくださったのだらうと思います。

— 初めてシンガポールに来られた当時の様子を教えてください。

杉野さん シンガポールにやってきた当時、一人当たりのGDPはUS\$1,000強で、発展途上国でした。とは言っても、シンガポールリバーの周辺は重厚な西洋建築が建ち並び、少し離れると中国人街、マレー人街、インド人街があり、教会、仏教寺院、イスラムのモスクが散在し、エキゾチックな街並みでした。当時シンガポールは西洋と東洋の十字路と呼ばれていました。

— また約50年のなかでとくに印象的だったこの国の変化について教えてください。

杉野さん ご存じの通り、シンガポールは1965年マレーシアから分離独立しました。英国軍の撤退発表に伴い、1967年国防軍を創設。また同年造幣局(Board of Commissioners of Currency, Singapore)を設



西山ひろ美さん

置し、独自通貨を発行。1971年にはMAS(シンガポール金融管理局)が設立されました。多国籍企業の誘致のために、税法、港湾施設、住宅、教育、工場地区の造成等タインフラ整備を進め、私がシンガポールにやってきた1972年はこうした国の基礎作りが一段落して、シンガポールは正に高みに向かって離陸した時だったように思います。その後の経済発展は目を見張るばかりで、1965年マレーシアから独立した年、約US\$500だった一人当たりのGDPが2024年にはUS\$9万ドルに届く勢いです。振り返ればよくここまでやってきたなという思いがいたします。

— 来星当時には考えられなかったご自身の変化がありましたら、教えてください。

杉野さん 最大の出来事は妻に出会ったことです。彼女は体も気性も真ん丸で、天真爛漫でした。当時オーチャード通りに有名なホーカー・センターがありました。通称「カー・パーク」と呼ばれ、現在のOrchard Centralビルは以前駐車場でした。午後5時になると車がいなくなり、何処からともなく屋台が車の行きかう道路をぬってやってきて、ホーカー・センターに早変わりしました。「カー・パーク」で食事をし、映画鑑賞するのがデートの定番でした。二人してよく「カー・パーク」で食事をしました。結婚が決まると、彼女は運動とダイエットで15キロ体重を落とし、ウエディング・ドレスを着ることにそなえました。その間、「カー・パーク」の食事は遠ざけました。

— シンガポール日本人会で働き始めたきっかけを教えてください。

杉野さん 1974年南洋大学に入って、中国語を3年間勉強しました。苦学生でしたので、在学中小さな新聞社で翻訳の仕事をしたり、日本語学校で教師をしたりして、学費を稼ぎ、糊口を凌いでいました。1977年通産省(当時)の下部機関である在外企業協会シンガポール相談所に現地スタッフとして採用されました。1984年同相談所閉鎖に伴い、シンガポール日本人会からお声がかかり、事務局次長として就職しました。



杉野一夫さんが日本人会事務局長の頃のお写真(1988年2月12日撮影)

— 現在は日本人墓地公園の案内や、シンガポールの歴史に関する講演会をされていますが、大切にされている思いや活動を通じ伝えたいことをお聞かせください。

杉野さん 日本とシンガポールの関係改善に携わってきた日本とシンガポール社会の先人たちを長年にわたって目の当たりにし、また自らも関りを持った一人としてこうした方々の努力が風化しないように願いながら、活動を進めています。

— 在星中の日本人にぜひ訪れてほしい場所やシンガポールにいる今だからこそ学んでほしいことはありますか。

杉野さん 歴史友の会(同好会)のメンバーや日本からの来訪者にお話をする機会が時々あります。私の楽しみの一つです。話題はシンガポールの概要に加えて、住宅政策、福祉政策、治安政策、教育制度、選挙制度等々です。いずれもたいへん優れた政策で、シンガポールの経済発展を支えています。皆さんにはシンガポールの発展振りが見られるHDB住宅地、URA展示場などに足を運んでほしいと思います。そして私が案内人を務める日本人墓地ツアー、戦跡ツアー、負の遺産講演会に参加していただきたいと思います。

— シンガポールの要人の方々とお会いした機会があったと伺っております。印象に残る方について教えてください。



日本人墓地公園内にある御堂にて
高田勇 長崎県知事をお迎えして

杉野さん 最も印象に残った方は、David Marshall氏です。外交、国防、財政、治安、法務を除く自治権が宗主国英国から認められ、1955年総選挙が行われました。David Marshall氏が率いるLabour Front党が政権を担うことになり、Marshall氏が首席大臣の座に就きました。同氏は直ぐに日本企業に開設許可を出し、日本人の復帰が実現しました。戦後、十数年に亘って日本人に門戸を閉ざしていたシンガポールがドアを開けました。Marshall氏は戦前辣腕弁護士でしたが、日本軍侵攻の際、義勇軍として戦い、捕虜になって、北海道に送られ、3年強、過酷な生活を送りました。

— どうしてDavid Marshallさんに会うことになったのですか。

杉野さん 1995年、終戦50周年の記念の年に、同氏が病気で床に伏していると聞きました。そこでお見舞いの花をお送りしました。数日後彼から礼状が届きました。礼状には日本企業2社に開設許可を出したことが記されていました。もっと話が聞けないかと思い、インタビューを申し入れました。



森田恵莉華さん

— インタビューはどうでしたか。

杉野さん 捕虜生活はどうだったかと尋ねますと、「来る日も来る日も40ポンドのハンマーで満州から届く鉄鉱石を砕く作業を行った。冬になると、気温がマイナス20度になって、最後の冬は越せないかと思った」そうです。「終戦を迎えると、米国の爆撃機が飛んできて、食料物資を捕虜収容所に落としていってくれた。麻袋の中にはクッキー、チョコレートなど食料が詰まっていた。収容所から垣間見ていた街の市民も食糧難で苦しんでいた。食料の詰まった麻袋を両腕に抱えて地元の子供たちのももに持って行って、分け与えた」そうです。敵国だった日本の企業に開設許可を出した経緯を質すと、「中国では共産主義が台頭していて、怖かった。日本はやがて独り立ちするだろう。そうなれば反共勢力の一翼を担うことになると思った。シンガポールが日本の復興に何らかのお手伝いができ、嬉しく思っている」と述べられました。

— 日本人会が戦後再発足したのは1957年でしたから、日本企業への開設許可は日本人会の再発足に繋がったんですね。

杉野さん 終戦50周年に当たり、シンガポールでは各地で占領時代を振り返る記念行事が行われ、日本人は肩身の狭い思いをしていました。そこで日本人会は何をしたら良いと思いますか、との問いに対し、Marshall氏は「寝ている犬は起こさない方がいい、過去の不幸はもう忘れなさい。日本人社会はよくやっていると思う。真の平和は友情から生まれるものだ。日本人社会はシンガポール社会との交流を積極的に図るべきだ」と述べました。David Marshall氏とのこの会見内容は私が事務局長職を進めるうえで羅針盤となりました。Marshall氏は会見から3か月後に他界されました。

— 「シンガポール日本人社会百年史」を編纂されました。編纂中とくに骨を折られたことや印象的だったことを伺わせてください。

杉野さん 百年史の編集作業をしながら、戦後の部分については私が執筆しました。ご存じのように日本とシンガポールの間には侵略、占領という暗い過去が横たわっています。戦後、

日本とシンガポールの関係は負の遺産を背負って始まりました。David Marshall 主席大臣が日本企業に開設許可を出し、日本人の復帰が始まったことは先にお話した通りです。更に1979年にはLee Kuan Yew 首相は「日本に学べ」運動を提唱し、シンガポール人の対日感情に大きな影響を与えました。それまで日本に手厳しい評論をしてきた知識人や経済人があからさまに日本批判することは無くなりました。一方、日本国政府はシンガポールの要望に応え、技術移転、人材育成に積極的に協力しました。日本人会、日本商工会議所もチャリティ活動、社会奉仕活動、文化交流、寄付活動などを長い間地道に続けてきました。現在、日本とシンガポールはこの上ない良好な関係を享受するに至りました。「百年史」の戦後の部分を執筆するに当たって、両国関係の改善過程、発展振りをつぶさに辿っていったことは幸せでした。

一 南十字星は今年60周年の記念の年です。長年シンガポールにお住いの杉野さんは在星日本人について、この数十年の中で気質など変化を感じることはありますか。

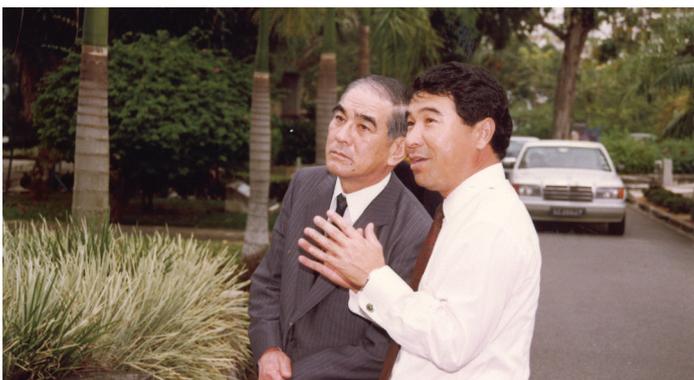
杉野さん 日本人会の職から離れて8年が経ちました。日本人の方々と接触する機会がすっかり減ってしまいました。気質に変化があるかどうかははっきりしませんが、一つ言えることはシンガポール人の対日感情に対する日本人の関心が薄くなったことです。少なくとも1990年代までは戦争への贖罪の気持ちが日本人の心の隅にあったように思います。贖罪の気持ちが薄らいできたのは両国の関係が成熟した証でしょう。シンガポールの若者は中学校の歴史の教科書で日本軍による占領時代のことを学びます。若いも若きもシンガポールの人たちは暗い歴史を知っています。同国で暮らす日本人はこのことに無知であってはならないでしょう。

一 これからのシンガポール日本人会に期待することは何ですか。

杉野さん シンガポール人の会員数がもう少し増えてもいいように思います。日本人会がシンガポール社会との交流の場としての役割を更に強めてほしいと思っています。

一 今後の日本人会はどのようにシンガポール社会に貢献していけばよいとお考えですか。

杉野さん 日本人会は永年にわたって、チャリティ活動、社会奉仕活動、文化交流活動を地道に続けてきました。日本人会が活動を支援するASSISI Home & Hospice ボランティア・グループは2002年にPresident's Social Service Award (大統領社会奉仕賞)を受賞しました。2008年にはコミュニティ・チェストから最高名誉のピナクル賞を受賞しました。2003年から参加を続けているチンゲイパレードでは2014年チンゲイ年間チャンピオン賞を受賞しました。こうした活動はシンガポール社会からも高く評価されています。今後も継続されることを祈念しています。



日本人墓地公園内にて
伊賀貞雪 愛媛県知事をご案内



海部俊樹首相をお迎えて

一 海外(シンガポール)から見る日本という国についてどのような感想を持ちますか？

杉野さん 嘗て経済発展の手本とシンガポールから崇められていた日本の経済は近年影が薄くなってしまいました。歯がゆい思いがします。しかし幸いにもシンガポール人の日本への関心が低下したわけではありません。日本を訪問するシンガポール人は昨年69万1000人に上り、新記録を達成、シンガポールを訪問する日本人の数57万3000を大きく上回っています。日本の印象を訊ねると、一様に食事のおいしさ、街中の清潔さ、安全、礼儀正しさを口にします。誇らしい気持ちになります。

一 杉野さんは今後どのような活動をなさりたいですか？

杉野さん 会員の方々や日本からの来訪者にシンガポールについてお話しするのがとても楽しい。ボランティアでやりますので、お声かけください。

編集後談

南十字星創刊60周年記念企画として、杉野元事務局長にお話を伺う機会を賜り、大変光栄に存じます。戦後、シンガポールと日本の関係改善および発展に尽力された先人の方々に深く敬意を表し、その歩みを今後引き継いでいきたいと思っております。改めて、貴重なお話を伺った杉野様に、心より感謝申し上げます。

広報部部長 藤本直哉

南十字星創刊60周年記念企画インタビューに杉野元事務局長をお迎えできたことをとても嬉しく思います。穏やかに話されながら、私達に在星日本人に貴重なお言葉を沢山いただきました。特に「若いも若きもシンガポールの人たちは暗い歴史を知っています。同国で暮らす日本人はこのことに無知であってはならないでしょう」という言葉は心に残りました。

編集部 西山ひろ美

南十字星創刊60周年記念企画インタビューに杉野元事務局長をお迎えできたことをとても嬉しく思います。杉野元事務局長が実際に体験してきたシンガポールという国の変化、そして日本人として在星する上での思いを直接うかがうことが出来、大変勉強になりました。貴重なお話を伺ったこと、心より感謝申し上げます。

編集部 森田恵莉華